

# 高知大学 病院ニュース

〔編集〕

高知大学病院ニュース

編集委員会

委員長 清水 恵司

〔発行人〕

高知大学医学部附属病院

病院長 倉本 秋

## お礼と提言

病院長 倉本 秋

**2** 月2日、病院長として最後の病院ニュースの原稿を書いています。折しも東京は雪の朝。前任地の同僚から「朝から病院の前の雪を片付けている職員がいます。あなたのことを思い出しました」というメールが入りました。確かに私は、雪の積もった朝は6時のバスでスコップを持って出勤し、病院玄関から急な坂道を音羽通りまで200mほど雪かきをしていました。初めは私一人でしたが、何年かするうちに有志が何人も集まるようになりました。

**み** なさんの前で、「5年でできないことは10年あってもできない」と公言してから6年あまり。一緒に、楽しく考え、改善に努めてこられたことに感謝しつつ、最後のお願いをしておきたいと思います。

**今** はまだまだ通過点、やらねばならないことはたくさんあります。いつでも何でもそうですが、現状に不満をこぼしても何の改善にも繋がりません。言っていること(現状認識)は正しいかも知れませんが、「井戸端会議が過ぎればそれまで」です。明日変わることはないでしょう。でも翌年、5年後には変えられます。どう変えたいか、変えたときどうなっているかを想像し、その姿をより良くするためにはどうしたらよいかを議論して欲しいのです。変革のために失われるものも考慮して、いい点は残すことも計画に入れてください。

**変** 革の手段は一つではありません。変革を最初から受け入れてくれる人は少ないものです。それならば隘路に合わせた身の丈、形態で仕事をやるしかありません。それでも仕事は進められますし、必ず味方が増えてきます。味方は多い方がいいですが、

決して群れないでください。ことの是非に付いて、グループの思惑に付かないことです。グループの思惑はしばしば、自分たちの利害であって、ことの正否ではないことが多いものです。また集団は、改革を成し遂げるためであっても、しばしばそれだけで指弾的になります。「実際には同じ志を持っているが今は方向性が異なる人」と仲良くなるためには役に立ちません。

**病** 院特有の事情に、起きている出来事の「当たり前さ」の違いがあります。医療看護を提供する自分たちにとって、そこで起きていることは「日常」ですが、患者さんやご家族にとっては稀有な出来事、「非日常」なのです。ですから説明する言葉を平易にすること、専門用語を用いないことが重要なのです。また、「合併症が起きる率は1%です」とお伝えすれば、私たちには「100人に一人には起きること」ですが、患者さんはその時点では「私には起きないこと」と理解しています。私たちは起きた時に辿るコースを経験的に知っていますが、相手は不安の激流に投げ出されているのです。手術や治療を行う前に、「合併症が起きた時の経過」を全ての人にお話しする必要はありませんが、起きた時には(緊急処置との順次性は考慮しながらも)できるだけ早く、ある程度詳しく、不安に共感しながらお話をしてあげてください。

\*\*\*

**改** 革と合併症を例にお話ししましたが、みなさんの感性で多方面に亘って改善を進められることを祈っています。ありがとうございました。

## 病院機能評価更新審査を受審して

病院機能評価受審のための院内ワーキング座長：谷 俊一 ◆ 宮井 千恵

昨年12月14日から16日の3日間にわたり、7名のサーベイヤーによる病院機能評価更新の訪問審査がありました。まずは、ワーキング委員の皆様はじめ各診療科、各部門等病院職員の皆様は総力を挙げて対応して下さいましたことにお礼を申し上げます。最初から最後まで適確にアドバイスいただきご指導下さいました倉本病院長にも感謝申し上げます。

平成20年6月に院内ワーキングが設置され、以後1年半の間準備をして参りましたが結局直前に出来上がったものもいくつかありました。人間は追い立てられなければならないということも実感しました。講評では、むしろ良い点が多かったように感じましたが、主な指摘事項は以下のようなものでした。

今後は、本院が目指す病院づくりのためにも、講評で指摘のあった事項と部署訪問等で指摘されたことについて継続して取組んでいきましょう。

最後に感想ですが、すべての病院職員の皆さんの“いざとなったらやる”行動力とチームワークに感心しました。このような状況ができるだけ長く続くことを願っています。

2月4日に病院機能評価機構から「中間的な結果報告」が届きました。結果は、全ての項目において合格点であり、「C」以下、「2」以下の評価はありませんでした。「補充審査」を受ける必要もありません。最終の結果報告は3月の予定ですが、ほぼ「合格」確定の評価結果です。まだ、諸手をあげて喜ぶ段階ではありませんが、皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

<p>【第1領域】 病院組織の運営と地域における役割</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 1階東病棟の喫煙場所は換気が悪い</li> <li>● 電子カルテ記載のガイドラインを作成すべきである</li> </ul>
<p>【第4領域】 医療の提供の組織と運営</p>	<p>[診療部門]● 医師の業務マニュアルを作成し、全医師に周知してはどうか [リハビリテーション部門]● 精神作業療法士を置くことを検討してはどうか [薬剤部門]● 抗がん剤の混合を一部病棟で行っている。適切な環境で行うようにすべきである [手術・麻酔機能]● ガーゼカウントの記録には、払出し枚数と使用済枚数の記録も残した方が良い [救急医療機能]● 受入れ不能時の解析を行うべきである [診療記録の管理]● 退院サマリーの作成率が悪いので100%に近づけるようにすべきである</p>
<p>【第5領域】 医療の質と安全のためのケアプロセス</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 身体拘束について、開始・解除の記録がないものがあつたので徹底を</li> <li>● 電子カルテであるが紙の指示書も使用しているので、紙を使わない工夫をすべきである</li> <li>● 薬剤部の病棟への関与が少ない</li> <li>● 与薬の手順が病棟によって異なるので統一をすべきである</li> <li>● 全部署へ与薬カートを導入してはどうか</li> <li>● 退院後の継続看護にもっと関われないか</li> </ul>
<p>【第7領域】 精神科に特有な病院機能</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 精神リハビリテーションのために精神作業療法士を置くことを検討してはどうか</li> </ul>

### 平成21年度 医学教育等関係業務功労者表彰を中川氏と土居氏が受賞



文部科学大臣は毎年、医学又は歯学に関する教育・研究や患者診療等に係る補助的業務に関し、顕著な功労のあつた者を表彰しています。

平成21年度も、この表彰式が11月25日に東京で行われ、本院の表彰者である中川雅文調理師と土居忠文副臨床検査技師長に賞状と銀杯が贈呈されました。

病院長から両名の方に対し「お二人が所属している部署とも患者さんからの評価が高いのは、お二人を初め皆さんががんばってくれているおかげです。これからも皆さんのお手本となつてがんばってください。」と感謝のことばがかけられました。

# 高知県周産期医療人材育成プログラム

【周産期医療環境整備事業（人材養成環境整備）】

近年、周産期医療体制等が大きな社会問題となっており、地域医療の「最後の砦」として、大学病院に対する期待が益々高まってきています。また、深刻な医師不足の中、周産期医療に関わる人材の育成は喫緊の課題であることから、文部科学省では『大学病院の周産期医療体制整備計画(平成20年12月5日文部科学大臣発表)』を策定し、国公私立大学病院におけるNICU(新生児集中治療室)等に関する人材育成に関する支援を行う周産期医療環境整備事業を行うことになりました。

この事業は、大学病院の周産期医療に関する若手医師の教育環境整備や、女性医師の勤務継続・復帰支援等を行うことにより、大学病院の周産期医療に関する人材養成機能の強化を目的としたもので、全国52大学から応募があり、本院を含め15大学の取組みが採択されました。

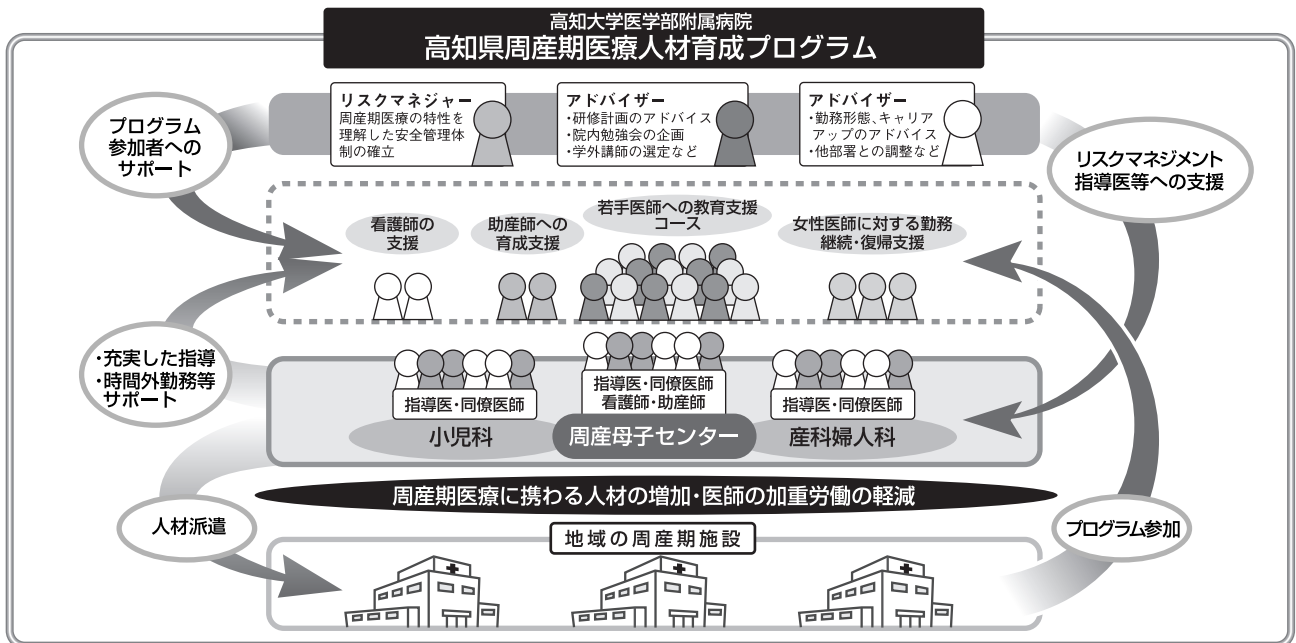
高知県周産期医療人材育成プログラムは、周産期医療に関わる若手医師の教育体制と女性医師の勤務継続・復帰支援体制の整備を中心に、指導医および看護師・助産師の勤務環境整備も同時に行うことにより、本院及び高知県における周産期医療の環境整備を目指すものです。

若手医師育成では、高知県の周産期医療の中核病院である本院と、より多くの症例を経験できる基幹病院等で研修を行い、ハイリスク症例に対応できる周産期専門医(母体胎児および新生児専門医)の取得を目指し、女性医師の勤務継続・復帰支援では、育児支援だけでなく介護支援、さらには女性医師自身の不妊治療に対する支援を行うとともに、ワークライフ・バランスの取組として、専任アドバイザーによる研修指導および勤務の調整を行います。

その他、専任リスクマネージャーによる安全管理体制の強化や看護師・助産師の育成や勤務支援、指導医の指導能力向上のための研修支援も行います。

本プログラムでは、若手医師の教育支援および女性医師の勤務継続・復帰支援を行うための複数のコースを設定しており、若手医師研修のアドバイザーとなる指導医2名、女性医師のアドバイザーとなる女性医師2名が個々の希望するキャリアや勤務形態に応じて研修できるよう支援します。

また、周産期医療に携わる医師・看護師・助産師を対象とした、院内勉強会や講師を招いての講演会なども企画し運営します。



現在、募集を行っている支援は以下のとおりです。

- 1) 周産期専門医を志す若手医師への教育支援コース
  - 小児科専門医・周産期専門医(新生児)育成コース
  - 産婦人科専門医・周産期専門医(母体・胎児)育成コース
- 2) 女性医師復帰支援コース
- 3) 新生児集中ケア認定看護師育成コース

- 4) 助産師の育成コース
- 5) 指導医の指導能力・資質の向上コース
- 6) 共通コース
  - 新生児蘇生法「専門」コース インストラクター資格取得コース
  - 新生児蘇生法「専門」コース 受講・修了認定(院内)コース
  - 不妊カウンセラー資格取得コース
- 7) 勤務継続支援
  - 育児支援
  - 介護支援(準備中)
  - 不妊治療支援(準備中)

## 職場紹介 **薬剤部**

文責：宮村 充彦

薬剤部は、医学部附属病院において、医薬品の供給、管理など、薬物療法に関する様々な業務を担う部署として、現在は、教員1名、薬剤師25名、事務員1名、事務補佐員5名計32名の配属となっています。開院当初は、教育職は無く、技官としての薬剤師8名、事務官1名でスタート致しましたので、隔世の感がございます。

現在、薬剤部は業務内容に応じ7つのセクション(調剤室、製剤室、薬剤管理室、薬務室、医薬品情報室、治験管理室、試験研究室)を有しております。業務内容は、各種コンピューターシステムを導入した医薬品管理・供給



業務は勿論であります。近年院外処方せんの発行などに伴い、外来・入院患者に対するチーム医療への積極的な参画を指向するようになりました。現在では薬剤師の専門性が求められ、薬剤管理指導業務、がん化学療法などでの注射薬混合業務、レジメン管理、緩和ケアチーム・NSTチーム・感染対策チーム、麻薬管理、臨床試験など、多数の業務に参画するため、人員をいかに配置し、適正な人選を行うかが課題となっています。特にがん化学療法における注射薬混合業務は、外来施行分の約95%、入院施行分の約84%において、薬剤師が無菌調製を行っています。こうした流れに加え、薬の適正使用、副作用対策、医療従事者の被曝問題など、医療安全における薬剤師の責任、

リスクマネジメントにおける薬剤師の役割はますます大きくなっています。見方を変えれば、薬剤師の専門性、知識、職能を発揮し、実臨床に大きく寄与できるチャンスであります。

さらに、病院薬剤師の職能は多様化しており、臨床に寄与する薬剤師育成教育への参画も行っています。平成22年度より、薬学6年制への移行に伴い、他県の薬科

系大学から、多くの薬学部学生長期実務実習生を受入れます。高知県には、薬科系大学がないことから、薬学部学生教育における高知大学病院に係る比重は自ずと高くなります。来年度、当院において、医学部学生のみ

ならず、沢山の薬学部学生が教育、実習を受けることとなります。高知大学病院における薬学部学生に対する教育・実習カリキュラムについては、全国的に普及している既存のものに加え、高知大学医学部の特色を持たした内容を盛り込みたいと思っています。教職員の方々には、是非、ご協力をお願いしたいと考えています。医学部学生、薬学部学生共に、未来のチーム医療を支えていくことを目指して、積極的な交流を行って戴きたい、また、そういう場を創って行きたいと考えています。

以上、薬剤部の紹介を述べさせて戴きましたが、今後とも、薬剤部に対するご指導ご支援を宜しくお願い致します。

### 診療状況

区分	外来	入院	
	延患者数	延患者数	稼働率
11月	21,612人 (新来1,407)	15,494人	85.4%
12月	21,533人 (新来1,380)	15,096人	80.5%
	院外処方せん 発行率	紹介率 (診療報酬上の紹介率)	
11月	76.84%	64.1%(56.7)	
12月	77.42%	66.4%(58.4)	

### 編集後記

今年もすでに1ヶ月以上が過ぎました。太平洋から昇る初日の出を拝んだのもつい先日のように思います。地元高知出身である坂本龍馬が今年に入りさらなる人気で、冬季オリンピック、南アフリカでのワールドカップ開催など今年は話題が豊富です。昨年は新型インフルエンザというブーム(…とっていいのかわかりませんが)が巻き起こり、今年に入っても引き続き受診される患者さんは後を絶たないなか、インフルエンザ治療薬の点滴静脈注射発売など、まだまだ話題は尽きそうにありません。当院では、昨年は病院機能評価受審という一大イベントがありました。今号で院内ワーキング座長の谷俊一教授と宮井看護部長に「病院機能評価受審して」の指摘事項とお言葉をいただいております。巻頭には倉本病院長よりお考えを戴きました。「いまはまだ通過点」のお言葉通り、私達もアンテナを充分にはりめぐらせ、さらなる病院改善に向け取り組んで行きたいと思っています。今年も宜しくお願いいたします。(文責：森田 靖代)